

随泉寺寺報

2001 年 11 月号

第 375 号

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

秋季門信徒法座

講師 正順寺住職 龍口了潤師

講題 「苦悩の有情をすてずして」

信仰の機織り

経といえば、仏さまの教えのこと。でも、経 という辞書で引くと、ちょっと違った意味に出会います。それは タテ糸 という意味、布地のもとになるタテ糸のことです。ヨコ糸は 緯 といいます。今でも地球上の位置するのに、経度、緯度という用語に、この意味が使われています。さて機を織るには、まずこのタテ糸を張り、次にヨコ糸を織り込んでいきます。このことからタテ糸は、つねにまっすぐに通った道、すなわち “不変の道理” という意味に転じ、教えをあらわす書物を 経 と呼ぶようになったのです。こう知れば、仏さまの教えは宇宙に張りめぐらされた真理のタテ糸。ヨコ糸を織りこむのは、今生きている私たちではないのかと考えさせられます。七条袈裟の経糸を修多羅と呼び教えをあらわします。袈裟の模様は風景だったり、花鳥風月ですがそれを貫いて経糸の修多羅が通っています。生活の中に経糸教えを貫くということでしょう。どんな真理でも、それを活用する人間がいなければ、この世にはあらわれません。だから仏さまは、私たちに信仰の機織をなささいと呼びかけてくださっているのではないのでしょうか。ここに仏さまとのご縁を結び、それぞれの人生模様を織りこんでください。

11月の法座予定

- 11月14日昼席午後1時より……秋季門信徒講座
- 11月14日夜席午後7時半より……出張法座 井原集会所
- 11月15日昼席午前10時より……秋季門信徒講座
- 11月15日昼席午後1時より……秋季門信徒講座

願われてあるもの

龍口了潤

『我が骨を 拾うべき子の 骨拾い
小さき壺を 抱きて帰れる』

中国新聞短歌投稿欄に寄せられていた歌です。作者のうめきが聞こえるようです。私の はからい の上からは、私の骨は確かに、我が子が拾って呉れる割でした。しかし、何と現実はいもよらなかった逆の有り様です。人はみな、そんな現実と直面し、うろたえ、とまどい、血迷い、涙の海に沈むのです。“生きよう と、もがけばもがくほど、現実の 生 は矛盾に満ち、あまつさえ、望まぬのに老い、病み、死へ赴いていかざるを得ない - まさに「人生は 苦 なり」と示されたお釈迦さまのお言葉以外の何物でもありません。だからこそ、この 苦 は人間における問題 = 生活苦といったものではなく、人間そのものの持つ根源的問題 = 人間苦といえましょう。すべての人の上に等しく、そして鋭く問われてある設問。「あなた自身の 生死 の解決はいかに」

『ひとりだけ 涙落とさぬ 子のありて 別れの集いの シュプレヒコール終わる』これも紙上でみつけた歌です。卒業を目前に控えた東北の中学の或る教師の歌です。土曜日の放課後でしょうか、クラス全員参加のもと、ジュースとケーキでささやかな謝恩会 別れの集い をする運びとなりました。会は進行し、いよいよ最高潮、全員で思いを込めてシュプレヒコールを唱和する段となりました。「先生ありがとう、みなさんサヨウナラ...」

みんなハンカチで涙をぬぐうほどの感慨をつのらせていた - そのとき、先生の目は或る一人の生徒の涙落とさぬ姿を見逃さなかったのです。涙流さぬのはどうしてか？彼の中学校生活は不満だらけだったのか？教え導く側の私に不足失態はなかったか？担任の先生は生徒の苦悩を自らの苦悩とされ、ともに悲しみ泣かれるのです。それがこの歌です。まさに阿弥陀さまのまなざしと言えましょう。 どうする術も持ち得ぬ煩悩そのものの私の解決 = すくいに如来さまは立ち上がってくださいました。

それもすでに。そして頼まぬのに、願わぬのに。

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

見真 平成13年9月号

註釈版 578 頁)

智慧の光明はかりなし 有量の諸相ことごとく

光暁かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ

大阪行信教校 校長 利井明弘

ある日、京都駅から発車寸前の普通電車に乗りました。空席はなさそうでした。そこで次の駅で降りそうな人を探し始めました。ところが、車内を見渡すと、上手くいけば座れそうな席があるではありませんか。

車内の奥の長い座席の端に、奥さんが子どもを膝に乗せて窮屈そうに座っています。その横にその子どもと私が座れる位の巾をとって、大きな荷物が座席の上に置いてあるのです。その荷物に肘をついて若い男が一人隣の友達らしき男と話していました。

じっと、その若い男を見ていますと、私の視線を感じたその男が顔を上げ目と目があいました。すかさず私は「その荷物を下ろしてくれないか」と目顔で信号を送りますと、通じたようで向こうからも身振りの返事がかえってきました。「アカン」

そうこうしている内に私が目をつけておいた人が、案の定、次の駅で降りました。私はその人の前に素知らぬふりで立っていたのです。座席に腰をおろしホッとして目をつぶろうとした私の前に、今の駅から乗ってきたお爺さんが立ち「近ごろの若いもんは…」と声に出してつぶやきました。私のことかと驚きましたが、お爺さんの目はあの荷物の若者に注がれていました。若者は知らん顔です。次の駅でこのお爺さんはわざわざ若い男の近くの出口まで行き、若い男に何か一喝して降りていきました。無関心を装っていましたが、乗客の殆どがこのいきさつに注目していました。ところが電車が高槻の駅の一つ手前の駅にきたときに、アッということがおきたのです。

まず若い二人が立ちました。荷物はまだ席に置いたまゝです。ドアを背中にグルッと乗客を見渡しました。変な予感がしました。そして電車がとまった時、一番端の奥さんが膝から子どもを下して、席にあった荷物を背にかつぎ、子どもの手を取ったのです。

そうです。若い男の荷物ではなかったのです。二人の若い男たちは、どうだわかったか、という顔をしてもう一度乗客を見渡し、皆があっけにとられている内に荷物を担いだ奥さんも退場ということになったのです。

自分たちの思い違いに、クスクス笑いだした人もいました。その時フッと思い出したのです。途中で降りたあのお爺さんは、きっと電車を見たことを家の人に話しているに違いないと。

「間違っていたのですよ」と伝えようもありません。

「有量の諸相」とは、かぎりある私たちのことです。人生は皆、途中下車なのです。世間の真実は駅ごとに変っていきます。明治・大正・昭和・平成と、時代という駅は変わりました。「天皇陛下万歳」と言って降りていった人もあるのです。

私たちも必ず降りなければなりません。目の前だけのことを、自分の智慧ではかってどうなるのでしょうか。三世をつき抜けて変わることのない真実、無量光を仰ぎましょう。そこに心の夜明けがあるのです。

ありがとうございます。

特別永代経	一金	十万円也	原本	安真様(故原本真美様)
特別永代経	一金	十万円也	原本	安真様(故山田 操様)
門信徒会	一金	五万円也	原本	安真 様
特別寄付	一金	五万円也		森川千恵子様